

# 汲古一

## 「題字の思い出」

中村素堂

その題字を二、三ヶ月毎に書き換えさせられ、隸書で書き行書で書き、幅十八センチのスペースに左横書きで七字を据えるのには全く苦心し、ついに二千六百などという画数の少ない字は互いに一部分を重ねてみるような書き方を考えついたりしても、じきに見腐れて陳腐になる。草隸まがいの行書でやったり、龍門風の楷書の時もあつたりしたが、逃げ切れなくなつたころにやつつこの大式典は、宮城前大広場に仮設の宮殿で無事完了して、あといくばくかの後に終刊となつてホツとした。

この苦しいが當時としては光榮の仕事がどうして私に廻つて来たのか不思議で仕方がないが、誰か知人が内閣にいたのでもなかつたようだ。四十余年を経過した今日になつて、あれは当時「青年学校」というのが全国に置かれ、その教科書の中の書道手本揮毫を担当させられていたので、出版元の帝國地方行政学会との関係で持ち込まれたものではないかと思つてゐる。

どうでもよいことだが、何だか法律、経済などの堅苦しいものが多かったのは、小役人のせいか、あるいはその辺りに由来するのかなと思つて「国鉄」というところはお客商売だから、旅客課の編纂で「神まうで」「お寺まあり」などという今でも珍重されている凝つた本が沢山刊行されていた。戦前のよいものは全部武田霞洞先生の題字であつた。戦後この種のもの全部、日本交通公社の仕事に移つて往年のような風雅なものは見えなくなつた。

こんなことを書いてきたついでに、近ごろ書きたいいくつかの本の題字に、「精進料理口伝」というのを揮毫したのである。これは一昨年九十何歳かで遷化された京都妙心寺の管長梶浦逸外禪師の著書で、老師はこのような方面にも大変ご造詣が深かつたというのには驚きつゞき、さてこれはどういふ調子で——とちよつと考えて、楷書じゃ様

にならないし、行草でイキに書いては、オイ精進料理だヨと叱られそう、おのずから行き方がきまり書いたのが、昭和五十九年九月第一版から今日まで続いている「精進料理口伝」である。

実はこのようなものが一番むずかしいのである。何々流生花教授、茶道教授とお琴・三味線のようなものとは、行草でも楷の味を多くするが、行草で流れを多くするか、むかしでもこれは苦心した痕跡がある。謡曲・仕舞の看板は俊成流平安末期の大歌人か定家流(俊成の子)なら間違いないといつてゐる人がある。それはその筈かも知れない。むかしの謡曲本は現代のものよりずつと俊成風のきびしい行書風であつた。徳川三百年、それ以前からたゆみなく進歩した茶道各派第一級の宗匠たちは、ほとんど定家流の信者で、茶道名器の箱書きはもとより消息から看板まで御家流全盛時でも、定家流とあれば漣を流していたらしいことは疑いない。

思い出してちよつと雑誌のことに触れてみる。

私どもが雑誌らしい雑誌に気づいたのは大正初期で、博文館時代といわれるほど多くの雑誌を出していたが、この博文館の中学世界・少年世界・講談倶楽部・農学世界などの題字は、みな名古屋の医師で、若い時から中年過ぎまでは東京で暮らし、書家で漢詩人でもあつた永坂石球先生の揮毫のものが多く、その剛い筆尖が磨り切れたような感じのする一線の收筆は必ず滯筆という特色のある書風の書がほとんどであつた。旧上野駅正面にあつた旅館の看板などはかなり注目のもので、大東京の木彫看板の百分の二は石球の字であつたと下谷の大看板屋さん、篆刻家の酒井康堂先生の父君・支山先生などはいつておられた。大東亜戦争前にはまだ都内に随分見られたが、ほとんど焼けてしまつて、どこかのお寺の寺号の題額で見うけられるくらい少なくなつてしまつた。

博文館が倒産し、中央公論、改造社などが雑誌の大社になると、六朝風・龍門風の書なども進出して、それこそ百家争鳴の觀をなして現代におよんでいる。